

第8章 新たな時代における地域福祉のあり方と可能性

1 with コロナ時代における地域福祉

(1) with コロナ時代を迎えて

新型コロナウイルス（COVID-19）の世界における感染者数は、2020（令和2）年12月末現在で8,200万人以上、死亡者数は180万人を超え、日本においても感染者数は23万人以上、死亡者数も3,000人以上となっており、全世界において猛威を振るっています。

これによりもたらされる影響は、直接的な病気のことはもちろん、時短営業や外出等の自粛によって、観光や飲食業等のさまざまな業種が経済的な影響を受け、それは雇用や労働条件の悪化にそのままつながり、明日の生活すらままならない人が多数生まれる事態となりました。

わたしたちは現在、3密を避けることやマスクの着用、手指消毒等の徹底をはじめとした「新しい生活様式」を実践しています。どれもこれもこれまででは考えられなかったことで、コロナ禍はわたしたちの生活を大きく変えてしまいました。まさに「今まで当たり前だったこと」が「当たり前でなくなる」という象徴的な出来事となりました。

福祉とは町民ひとりひとりの「暮らし」に直結するものです。つまり、地域福祉を推進するためには、with コロナという概念を抜きにしては語ることはできず、これからの5年間を考えていく本計画においてもその取り組みの推進には新しい生活様式に沿って行っていく必要があります。

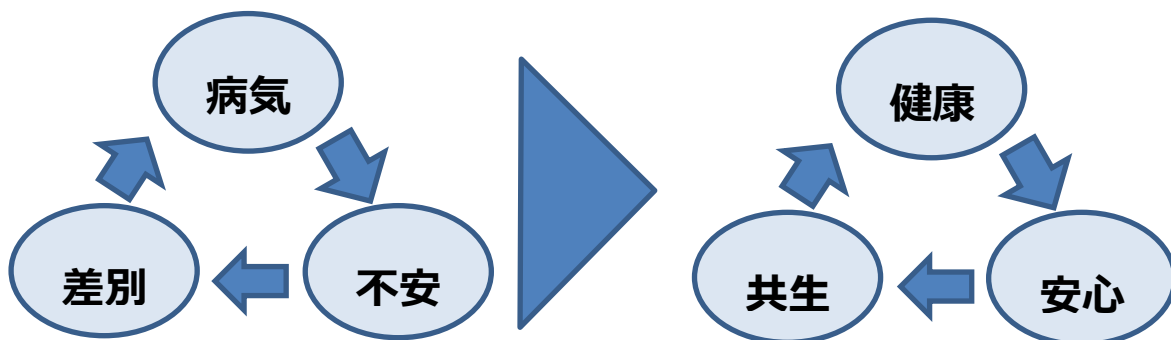
地域共生社会の実現によりもたらされるセーフティネットの強化は、平時だけでなくこのような非常時にこそ役立つものであると言えます。お互いが支え合いやつながりを強化して支え合うことで、困難な時代を乗り越えていきたいと考えています。

(2) with コロナでの支え合いと新たなスパイラルの確立に向けて

コロナ禍においては、地域における活動についても、今までのように住民が集うことが出来なくなりました。しかし、こんな時代だからこそ、地域で創意工夫し、新たな活動をしていただけるような支援に取り組めます。

また、新型コロナウイルス（COVID-19）の怖さは、「病気」「不安」「差別」の3つの顔がつながり、生活に影響を及ぼすとされています。（日本赤十字社「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！～負のスパイラルを断ち切るために～」より）

つまり、「病気」が「不安」を呼び、不安が「差別」を生み、差別がさらなる病気の拡散につながっていくということです。この負のスパイラルを、全国社会福祉協議会が進める「健康」「安心」「共生」というプラスのスパイラルに変えるべく、高鍋町でも福祉教育の取組を推進します。



日本赤十字社

「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！
～負のスパイラルを断ち切るために～」より

全国社会福祉協議会

「あなたのまちでやさしさをひろげるために」より

（３）ピンチをチャンスに変えて

コロナ禍により多くの事業者が打撃を受ける中で、これを一つのビジネスチャンスと考える取り組み、例えばデリバリーサービスの拡充やオンラインやリモートを活用したツールの開発、個人でも副業等のサイドビジネスなどさまざまな事例が報じられています。

これはビジネスの話だけではなく、地域福祉の推進においても同様であると考えます。困難な状況が訪れたからこそ見えてくる課題もあります。重要なのはそのことを見過ごすのではなく、しっかりとキャッチして取り組みにつなげていくことではないかと考えます。大切なのはピンチの状況をいかにチャンスに変えることができる発想を持つことができるかで、高鍋町では今後も各自治公民館等と連携を図りながら、何ができるか、何をしないといけないのかを考え、プラットフォームの形成に向けた地域づくりにつなげていきます。